Renato Motha
Patricia Lobato

珠玉の夫婦デュオが魅せてくれた透明で清廉な音楽と“ミナス気質”

文●中原　仁
texto por JIN NAKAHARA

ブラジル内陸部の高原地帯、ミナスジェライス州からの爽やかな風が、はるばる海を渡り、春真っ盛りの4月の日本に届いた。

ミナスジェライス州都、ベロオリゾンチをホームに、文学の香りもただよう良質な音楽を紡ぐ夫婦デュオ、ヘナート・モタ（ヴォーカル、ギター）&パトリシア・ロバート（ヴォーカル、パーカッション）。99年から現在までに発表した5枚のアルバムはすべて日本盤も発売され、優美で繊細な音楽性を愛する日本のファンは多い。彼らの作品の日本での発売元、NRTレーベルの設立5周年を記念して初来日ツアーが実現。不純物がまったくない透明で清廉な歌声はどこまでも美しく、聴き手の心からすべての雑念を洗い流す薬効があった。

ヘナート&パトリシアの音楽に対する誠実な姿勢はつねに一貫しているが、5枚のアルバムはそれぞれ、独立したテーマとコンセプトに根ざしている。インタビューではまず、そのうちの3作品について聞いた。

●『ジョアンに花束を』

ミナスが生んだ世界的な文学者、ジョアン・ギマランイス・ホーザ（1908—67）に捧げた最新作。歌詞に芭蕉の名を折り込んだ「俳諧バイアォン」という曲もある。マリア・ヒタをサポートしているチアゴ・コスタ（ピアノ）とシルヴィーニョ・マズッカ（ベース）が録音に参加、ヘナートのギターが軸になっていた過去の作品とは異なるサウンド、音像も新鮮だ。この2点を中心に、ヘナートにコメントしてもらった。

ジョアン・ギマランイス・ホーザの作品の特徴として、独得の言葉遣いがあります。彼は、ミナスジェライスの内陸の伝統的でピュアな言語と海外の言語をミックスしました。彼は世界中のさまざまな言語に精通していたのです。ジョアン・ギマランイス・ホーザの作品は、ネイティヴなミナスの言語とユニバーサルな言語との複合で、さらに、とても音楽的な響きがあります。ですから私は作詞作曲にあたって言葉の音楽的な響き（ソノリダーデ）に最も気を配りました。

『ジョアンに花束を』
(CD:DDCN-3014)

アルバムを象徴する曲のひとつが「俳諧バイアォン」です。ヴァルテル・ブラガが書いた歌詞は2005年、サンパウロのテレビ局が開催したミュージック・フェスティヴァルで最優秀賞を受賞しました。ブラジルのバイアォンのリズムと、芭蕉の美しい俳諧からインスピレーションを得た、ブラジルと日本の文化の融合です。歌詞の中には言葉の遊びもあります。〝オ・サント・バショー（聖人・芭蕉）〟、この言葉の響きは「聖人が降りてくる」という意味のポルトガル語に近く、ここでの聖人は、アフリカからブラジルに伝わった宗教「カンドンブレ」の神様もダブル・ミーニングしています。つまりこの曲はブラジル、日本、アフリカのミックスです。

ソング・フェスティヴァルで「俳諧バイアウン」のアレンジを行なったのがチアゴ・コスタで、シルヴィーニョ・マズッカはフェスティヴァルのベーシストでした。彼らとは、マリア・ヒタがファースト・アルバムで私の曲を録音したときからの知り合いで、こうして私たちは友情を積み重ね、自然な成り行きで彼らを録音に誘いました。

©RYO MITAMURA

●『ドイス・エン・ペソア』

初めて日本盤でリリースされ、多くの人々の心をとらえた記念碑となる作品。ポルトガルの詩人、フェルナンド・ペソア（1888—1935）の作品にヘナートとパトリシアがメロディーをつけた。アルバムは2枚組で、それぞれに「サンバス」「カンサウンイス」という副題がある。その意図は？

ジョアン・ギマランイス・ホーザと同じように、フェルナンド・ペソアの詩は尽きることのないインスピレーションの泉です。私は以前から彼の詩に曲をつけ、ソロ・アルバムで発表してきました。彼はさまざまな名前を使い分け、アルヴァロ・ヂ・カンポス名義で発表した詩にはユーモアや皮肉のセンスがあります。そこにはサンバの詩作に通じる要素があるから、曲をサンバにしたらどうかと提案したのはパトリシアでした。非対称な言葉をサンバのリズムとメロディーに乗せて統一感を生み出す作業は簡単ではありませんが、新たな挑戦になりました。一方、アルベルト・カイエイロ名義で書いた詩は繊細で内面的なものが多く、静かなカンサウンとして作曲しました。（ヘナート）

この企画は私たちがミナスジェライスの田舎で過ごした休暇中に生まれました。ペソアの作品を読んでいるうちに、私たちは彼の世界の中を泳ぎ始めたのです。降り止まない雨のように曲想が次々に浮かんできて、眠ることも出来ないほどでした。（パトリシア）

『ドイス・エン・ペソア』
(2CD:DDCZ-1099/1100)

●『サウンズ：平和のための揺らぎ』と「マントラ・セッション」

今回のツアーは、会場に応じて3種類の編成で行なわれた。デュオ公演、中島ノブユキ（ピアノ）と沢田穣治（ベース）を加えたカルテットの公演は、ここまでにあげた2作品とヘナートのオリジナル曲で固めたアルバム『プラーノス』の収録曲を中心とするプログラムだった。

異彩を放ったプログラムが浄土宗大本山・光明寺の大殿（本堂）で行なわれた「ブラジル／インド／鎌倉～ヘナート・モタ&パトリシア・ロバート　マントラ・セッション」。この日は他の公演とは異なり、ヨガのマントラにヘナートがメロディーをつけて2人で歌ったアルバム『サウンズ：平和のための揺らぎ』の収録曲だけを披露した。

マントラ・セッションには沢田穣治とヨシダダイキチ（シタール）が参加。ヘナートとパトリシアは畳の上に座り、パトリシアはタブラも演奏。2人が歌うマントラを聴いていると、アジアからバルカンやケルトまで世界中のさまざまな風景の断片が脳裏をよぎったり、心地よい午睡の誘惑に襲われる瞬間もあったが、ポルトガル語の歌を封印したにもかかわらず、むしろヘナートのオリジナル曲以上に〝ミナス気質〟が染み出ているように感じた。

このセッションの中でキラリと光る存在感を発揮していたのが、カルテット公演にも参加した沢田穣治。異種格闘技と言ってしまうと誤解を招くかもしれないが、〝日本のお寺でブラジル人がマントラを歌う〟という特殊な環境設定の中、主役の2人のサポートに徹しながらも全体に背骨を通わせる役割を果たしたパフォーマンスは賞賛に値する。

それではアルバムについて聞いていこう。

2004年からクンダリーニ・ヨガのスクールに通い、翌年には先生になりました。

©SHINICHI TAKAHASHI

もちろん今もヨガを続けています。クンダリーニ・ヨガでは「音」がとても大事。「この世界に存在するものはすべて、ひとつの音から始まる」という教えがあり、マントラを唱えることによって、自分の体にしみついた悪い気を洗い流しトラウマを壊す、精神的・肉体的な効果があるのです。（パトリシア）

パトリシアを通じて私もヨガ、そしてマントラに興味を持ち、マントラにメロディーをつけることを思い立ちました。作業にあたってのポイントのひとつは、マントラのメッセージは聖なるものですから、メッセージを尊重し敬意を払い、余計な装飾を加えず少ない音数のメロディーをつけること。これは『ドイス・エン・ペソア』のケースと一緒です。

もうひとつは、私たちはブラジル人であってインド人を真似することは出来ませんから、私たちが持っている感覚や視点を通じてマントラを歌うということです。作曲していて「音楽は精神で演奏する」というマイルス・デイヴィスの言葉を思い出しました。マイルスも、少ない音数で独自の音楽世界を作り上げた音楽家です。（ヘナート）

『サウンズ：平和のための揺らぎ』
（CD:DDCN-3008）

●ヘナートとパトリシアの音楽的な背景

彼らの音楽が、文学そしてヨガといった分野からも多くのインスピレーションを得ていることは、以上の3作品が象徴している。では、2人はこれまでにどんな音楽を聴き、影響を受けてきたのだろうか。それぞれコメントしてもらった。

©SHINICHI TAKAHASHI

私の音楽人生には、とても多くの影響があり、話が長くなりますが、いいですか（笑）。

私は4歳でテレビ番組に出演し、イェ・イェ・イェ（注：60年代のブラジルで一世を風靡した歌謡ポップス。日本のグループサウンズにも通じる）のヒット曲を歌いました。幼い頃の私はロックが大好きで、最初の偉大なアイドルはホベルト・カルロス。彼は私の王様、英雄です。

思春期には、クルビ・ダ・エスキーナ（街角のクラブ）の音楽家に熱中しました。ミルトン・ナシメントの歌唱、トニーニョ・オルタのギター奏法。トニーニョに憧れ、彼のすべての曲を聴き、歌をやめてエレキ・ギターだけ弾いていた時期もありました。ミルトン、トニーニョ、ロー・ボルジス、ベト・ゲヂスといったクルビ・ダ・エスキーナの人たちは、ミナスジェライスの音楽のアイデンティティを確立しました。丹念に練り上げたハーモニーと内省的な音楽性は、山に囲まれたミナスジェライスの環境、人間の気質を反映していて、私たちに与えた影響は絶大です。

さらに成長してからは、アントニオ・カルロス・ジョビンとジョアン・ジルベルト。偉大な作曲家であるジョビンは、ジョアン・ギマランイス・ホーザの作品から多くのインスピレーションを得てきました。そういう点でも親近感をおぼえます。ジョアンの歌は、聴き返すたびに新たな発見があり、聴けば聴くほどますます魅了されています。

こうしたブラジル音楽に加え、ジャズの影響もあります。マイルス・デイヴィス、チェット・ベイカー、パット・メセニーなど。また近年、クラシックが私の中に占める割合もどんどん大きくなってきました。マントラもそうです。こうしたいろいろな音楽のチャンネルがあり、それらすべてが関連しながら私の音楽を形成しています。（ヘナート）

クラシックが大好きだった祖父の影響で、幼い頃からクラシックに親しんでいました。学校では声楽、オペラを学び「カルメン」などを歌っていました。ジェシー・ノーマンの歌が大好きで、影響も受けています。ブラジルの女性歌手の中で最初に強烈な印象を受けたのは、エリス・レジーナ。その後、マリーザ・モンチからも大きな影響を受けました。ジャズではジュリー・ロンドンのクールな歌声が大好き、エラ・フィッツジェラルド、ビリー・ホリデイも。最近はマントラを通じてインドの音楽、サンスクリット語の歌にも興味を持っています。（パトリシア）

●ミナスジェライスの新世代の音楽家

ヘナートが絶大な影響を受けた、ミルトン・ナシメントを筆頭とするクルビ・ダ・エスキーナの音楽は、たしかにミナスジェライスの風土を象徴している。しかし彼らがミナスのすべてではない。スカンキ、パト・フ、アナ・カロリーナといった、現代のブラジル・ポップス・シーンの先端にいるバンドや音楽家もミナスの出身だ。そこで最後に、ヘナート&パトリシアとの交流がある、地元の新世代の音楽家の名前をあげてもらった。

ケブラ・ペドラという、才能あふれる若者たちのグループがあります。メンバーは全員、正式な音楽教育を受け、それぞれの楽器をマスターしています。彼らは私と同じようにジョアン・ギマランイス・ホーザやアントニオ・カルロス・ジョビンを敬愛していて、素晴らしい文化は時代や世代を越えて伝わっていくことを実感します。

ギタリストのウェベル・ロペスは同世代の友人で、ミナスジェライスの音楽の伝統を受け継ぐ、尊敬する音楽家です。ベロオリゾンチで開催されるヴィオラウン（ガット・ギター）の国際フェスティヴァルがあり、世界中のヴィオラウン奏者が集い、ミナスからも毎回、才能を備えた新たなヴィオラウン奏者が登場しています。彼もその一人です。

私の世代の作曲家の中では、まずセルジオ・サントス。それからヴァンデル・リー。彼は偉大な詩人、歌手でもあり、日本ではあまり知られていないでしょうが、ブラジルでは成功を収めています。『ジョアンに花束を』には彼と共作した曲もあります。（ヘナート）

ケブラ・ペドラの女性歌手、レオヌーラは『ジョアンに花束を』に参加しました。彼女は画家でもあり、このアルバムのジャケットのイラストとデザインも手がけました。他に女性歌手ではレオポルヂーナ、マリーナ・マシャード、そしてヘジーナ・ソウザ。彼女はヴァンデル・リーの夫人です。（パトリシア）

ヘナートとパトリシアは、その音楽から誰もが感じとるだろうイメージと等身大の、誠実で穏やかで慎み深い人たちだった。かといって神経質なところはなく、つねに柔和な笑顔を絶やさない。以前から、勤勉実直で細やかな気配りの心を備えたミネイロ（ミナスの人）の気質は日本人に相通じると言われてきたが、現時点では「ミネイロは、現代の日本人の多くが失いかけている本来の気質を今も備えている」と、自戒をこめて言うべきかもしれない。

©RYO MITAMURA